

SDGsの視点を通して学びあう小学校家庭科の授業

ー持続可能な社会へのまなざしを育むー

岡 部 雅 子

I 問題の所在

- 1 小学校家庭科とSDGs
- 2 SDGsを題材に取り上げる

II 授業実践の流れ

III 授業実践の実際

- 1 SDGs新聞を書く
- 2 発表を聞き合い、自分たちにできることは何かを考える
- 3 セブン&アイホールディングス訪問授業
- 4 できることを実践する

IV 授業実践の考察

- 1 SDGsが題材としてもつ力と適時性
- 2 目標同士につながりに気づく
- 3 問いの種を孕むSDGs

V アンケート結果の考察

- 1 学びが大きかったのは友だちの発表を聞くこと
- 2 授業後の行動や意識の変容
- 3 授業のアイデア

VI まとめ

- 1 本実践から明らかになったこと
- 2 次なる授業実践に向けて

I 問題の所在

1 小学校家庭科とSDGs

ここ数年、教育現場でSDGsの視点を取り入れた学習に広がりが見られるようになってきた。このことについて北村（2019）は『『プラネタリー・パウンダリー（地球の限界）』に対して、破滅的な状況を回避し、人々がより『豊か』で安定した生活を送り、自然環境がこれ以上悪化することなく、さらにはより健全な状況へと回復する』等といった「SDGsが提示しているさまざまな課題を解決していくうえで、教育を通じた人材育成や知の創出が欠かせない」と述べている。

SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）とは、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っている。（外務省、2021）

これまで筆者は、環境や人権など国際的な課題と現在の自分たちの生活とのつながりを意識し、エシカル消費に焦点をあてた授業を、お茶の水女子大学附属高等学校との連携で行ってきた⁽¹⁾。小学生にとって身近な商品であるチョコレートには、その原料のカカオの生産地で行われている児童労働という背景がある。そのことを小学校5年生が附属高校の生徒から学ぶ授業は、「チョコレートを選ぶとき、どんなことを気にする？」という単元名で、形をすこしずつかえながら2017年から現在まで継続している。⁽²⁾小学校で種を蒔き、中学校や高等学校でもエシカル消費についてスパイラルに学び続けることで、子どもたちが行動を起こす意欲を持ち、その範囲が広がっていくのではないかと期待がある。

しかし、筆者には、こうした地球規模的な課題を小学校家庭科の学習として取り上げることにやや躊躇があった。それは、学習内容の空間軸を主に自己と家庭、時間軸を現在及びこれまでの生活としている小学校家庭科において（文部科学省、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭編、2018、p.17）題材として取り上げたところで、子どもたちは興味を示すのか、また、生活とかけ離れた絵空事に終わってしまうのではないかと考えていたことによる。実際に、2017年に行われた本校の第79回教育指導実際研究会で、児童労働とフェアトレードを題材に取り上げた授業を行った際、参会者の先生方から「身近な生活とのかかわりが見えにくい」とのご指摘を受けたことが印象深い。

2 SDGsを題材に取り上げる

そのような中で、家庭科の授業においてSDGsを題材として取り上げて実践してみたいと考えた理由は二点ある。

一点目は、新型コロナウイルスの感染拡大である。これまでも、グローバル化は指摘されており、日本の生活の中に、世界の状況が色濃く反映されていることはわかっているつもりでいた。しかし今回のコロナ禍では、アジアにとどまると思われていた感染が、あっという間に世界中に広がり、例えばマスクや消毒薬が街で簡単に購入できなくなるなど、日常当たり前の生活がいかに諸外国とつながり、依存していたかという現実を痛切につきつけられることになった。

この切実な状況から、生活をよりよくするために学ぶ家庭科が、自分たちの見える範囲でのみとどまっていたのでは不十分ではないか、という思いが強くなった。これまでの学びに加えて、地球規模で起こっていることを知り、より広い視野で自分たちの生活を捉えていく経験が必要である。学校での学びを一人ひとりの生活に生かし、家庭で実行することができれば、家庭科の学び「課題発見と解決」にも寄与できると考えた

また、もう一点は本校の研究の柱であるてつがく創造活動とのかかわりにある。てつがく創造活動の目標は、自ら学びを構想し、様々なひと・もの・ことと関わりながら探究していくことを通して、社会の変化と主体的に向き合い、民主的な社会を支える市民の一員として、創造的によりよく生きるために、他者と協働しながら主体的に思考し、行動する市民性を育むことである。（お茶の水女子大学附属小学校教育実際指導研究会発表要項2021）今まさに大きく変化している社会のまっただ中にある6年生は、2030

年には22歳，ちょうど社会の担い手となる年齢となる。この子どもたちが，自分の生活のことだけでなく，広く地球の現状や課題について知り，今自分たちにできることを考え，小さなことでも実行してみる経験をするには意味があると考えた。

以上の問題意識から，本稿では2020年9月～12月に実践した授業の実際の成果と課題を明らかにし，抽出された課題を次なる実践の手がかりとするものとする。

II 授業実践の流れ

前述のように，2020年9月から12月までの期間，SDGsを題材として授業実践を行った。対象は，本校6学年108名である。本稿では，そのうち1学級（27名）の実践について報告する。

題材名は「SDGsを身近に感じ，今とこれからの生活を考えよう」，本題材のめあてはSDGsについて知る，SDGsと自分の生活とのつながりに気づき，自分のできることを考えて実践する，とした。

学習指導計画は以下の通りである。

（一斉休校期間中の課題として） SDGsの17の目標のうち，自分が興味をもった目標について「SDGs新聞」を書く。

1～4時：一人ひとりが新聞の発表を行い，その時間の振り返りを絵だよりに書く。

（授業は隔週1時間×4回）

5時：家庭学習期間に実践できそうなことを考えてアイデアを共有する。

（家庭学習期間の課題として） 自分のアイデアを実践する。

6時：家庭で実践してきたことを発表しあう。

*授業時数として全6時間

III 授業実践の実際

1 SDGs新聞を書く

まず，コロナウィルス感染防止のための休校期間中に，SDGsの17の目標のうち自分が興味をもった目標についての新聞を書く課題を出した。

6年生の子どもたちは，家庭科の消費生活の学習の一環として，前年度5年生時の2020年2月に，附属高校の1年生と合同授業を行っている。自分の生活にある身近な商品の背景を知り，物を買うときの選び方について考えたり，世界で起こっていることについて興味を持って調べてみたりできるようになることをねらい，例年と同じくチョコレートの原料であるカカオ生産の背景にある児童労働を題材とした。

その時の授業ではまず，高校生の代表生徒が「チョコレートの秘密」というプレゼンテーションを行った。その話を受けて，8～9名のグループごとに，世界の児童労働の実態や，子どもたちが教育を受けられないことによる影響などについて対話をした。その後，児童労働をなくすためにわたしたちができることは何かを考えた。

合同授業の後には，1時間，筆者が「SDGsって何だろう？」という授業をおこなった。子どもたちに「SDGsスタートブック」（2020）を1冊ずつ配布し，教師から概要の説明を行い「気になった目標は何

表1 子どもたちが新聞に取り上げた目標（27名分）

目標番号	SDGsの目標	人数
1	貧困をなくそう	3
2	飢餓をゼロに	2
4	質の高い教育をみんなに	2
5	ジェンダー平等を実現しよう	1
6	安全な水とトイレを世界中に	1
7	エネルギーをみんなにそしてクリーンに	5
8	働きがいも経済成長も	1
10	人や国の不平等をなくそう	1
11	住み続けられるまちづくりを	2
12	つくる責任つかう責任	3
13	気候変動に具体的な対策を	1
14	海の豊かさを守ろう	3
15	陸の豊かさを守ろう	1
16	平和と公正をすべての人に	1
17	パートナーシップで目標を達成しよう	1

か」という問いかけをした。

新聞作りは、そうした学習を踏まえてのものだったが、休校期間中であつたので、直接細かい指示を出すことはできず、教師からは、「17の目標から一つを選び、A3版の紙に書く」程度の指示にとどまった。子どもたちが新聞に取り上げた目標の一覧は表1の通りである。1人、複数の目標を扱った子どもがいたので、表中の合計人数は28名となっている。

2 発表を聞き合い、自分たちにできることは何かを考える

本格的に毎日の登校がはじまった9月に入り、SDGs新聞を発表し合い、一人ひとりが書いた内容の交流を行った。発表時間は一人3分とし、目標番号の順番で1時間に6～7人ずつ、発表を行った。前半3人または4人の発表が終わったところで4分間質疑応答の時間を設け、後半も同様に発表と質疑を行った。発表形式は自由としたところ、新聞を画面カメラで拡大投影する、自宅のパソコンでパワーポイントを作成する、紙芝居形式の発表資料を作成する、などの発表方法が見られた。

聞く側の子どもたちには、発表の前に黄色の付箋と青色の付箋を1枚ずつ配っておいた。学習時間の終わりに、その日の発表の中で、自分の生活とのつながりに気づいたら黄色の付箋に、生活の中で自分ができそうなことが思い浮かんだら青色の付箋に書くように指示した。付箋は目標ごとに、四つ切りの画用紙にまとめて貼っていった。(図1)

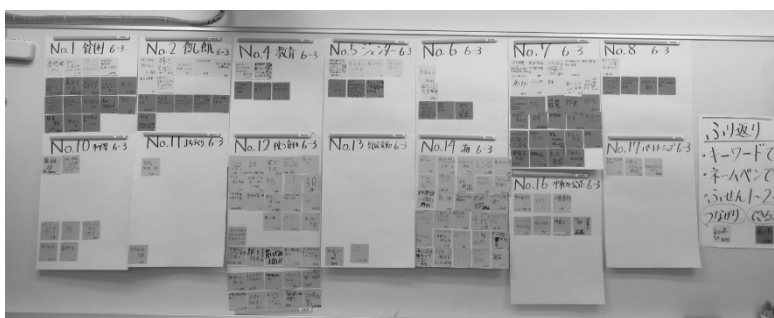


図1 毎授業後に書いたふり返りの付箋

付箋は全ての目標に対して必ず2枚書かなければならないとはせず、どちらか一方は必ず書くという約束にした。目標によっては、自分が実践できそうなことを、すぐに思い浮かばないケースもあると考えたからである。

SDGsの内容は多岐にわたるため、授業時間内に友だちの発表を聞いて終わりにするのは、もったいないと考えた。今一度自分の中で咀嚼し、考えを継続させるために、次週までの課題として教師あてに絵だよりを書いてくることにした。絵だよりとは、日常的に学級担任あてに書いている絵日記のようなものである。子どもたちからの絵だよりには、授業者が返事を書く。これを4回繰り返した。例として、A児の絵だよりを示す。

9/11(金) SDGs絵だより 岡部先生へ 「人間のせいで」

今日の発表は、SDGsのNo. 14, 15を選んだ人の発表だった。

陸や海の豊かさを守ろうという目標ができたのは、そもそも人間が荒らしたからなのでは?と思っ

ている。
なぜなら海でとれる魚の量が減ったのは、人間がとりすぎたからだし、砂漠化は人間が豊かになるためにつくった車や工場などが原因だ。ほかにも、マイクロプラスチックは人間が捨てたものだし、地球温暖化だって人間が豊かになるために作ったもののせいでなったものだ。

よく「自己中心的」という言葉を聞くが、そもそも人間が「自己中心的」いや「人類中心的」なのではないだろうか。もちろん、先に書いたことに対抗してがんばっている人だっている。なので、そういう人達を見習って、SDGsを達成できればいいと思った。(A児)

この内容に対し、筆者は次のように返事を書いた。

本当にそうだと思います。「人類中心的」だから起こってきた環境破壊、「地球中心的」な視点で考えていく時代です。

3 セブン&アイホールディングス訪問授業

SDGs新聞の発表が全員終わったところで、今年度からお茶の水女子大学と連携しているセブン&アイホールディングス本社での訪問授業を行った。授業の形式や時間配分は学校での授業通りで、発表者は6名とした。子どもたちの実態から発表希望者が多いことを想定し、希望者の中から選ぶのではなく、もう一度皆で考えてみたい話題について発表者を選出することとし、子どもたちにアンケートをとって決定した。

当日は、多くの社員の方が実際の会場ならびにオンラインで子どもたちの発表に耳を傾けた。これは、筆者にとっても貴重な経験で、こうした大きな社会的な課題について、大人も子どもも共に考える時間を共有することは、企業や学校等といった枠組みを超えてとても貴重であると感じた。

4 できることを実践する

次に発表を踏まえて、一人ひとりが行動を起こす機会を設けたいと考え、家庭学習期間にできることを実践する課題を出した。実践のアイデアを多様にするため、同じ目標を発表した子どもたち同士で集まり、友だちから寄せられた振り返りの付箋を参考にしながら、家庭学習期間中に家庭でできそうなことはどんなことかアイデアを出し合った。アイデアは、新たな付箋に一人ひとりが書き、全員分をまとめて印刷して配布し、家庭での実践の参考にするように助言した。

家庭学習期間中に実践したことはB5版1枚のレポートにまとめさせ、学級ごとに全員分を印刷し、冊子にした。家庭学習期間明けの授業では、どんなことを家庭で実践してきたか、ひとりひとり紹介させた。具体的な家庭での実践をまとめて示したものが、表2である。

表2 子どもたちが家庭で実践した内容

3R・5R	エコバッグや水筒を持ち歩いた
エコ（環境）	節電・節水を心がけた 油の捨て方を工夫し、排水口に流さないようにした ビニール袋を無駄につかわないようにした
寄付・募金	WFP ⁽³⁾ 、オリーブ募金 ⁽⁴⁾ に寄付をした
食品ロス	美味しく食べきりやすい献立を工夫した すぐに食べるものは賞味期限の短い物を買った フードバンクに寄付した
買い物	買い物リストを作って買い物に行った フェアトレードマークに注目して商品を選んで買った
知る	住んでいる町が行っているSDGsの取り組みを実際に見てきた 我が家の電力使用量を調べて昨年度の実績と比較した マイバッグのよさについて改めて調べ直してみた
知らせる	SDGsに関するポスターを書いてマンションの掲示板に貼ってもらった 朝日小学生新聞に投書をした 家族と相談をして家庭でできることを実践した

IV 授業実践の考察

授業実践を終え、成果と課題について考察する。

1 SDGsが題材としてもつ力と適時性

本実践を終えて、強く印象に残ったことは、SDGsに対する子どもたちの意欲的な取り組みの姿である。家庭科の他の題材にはあまり興味を示さなかった子どもが、SDGsの授業では非常に意欲を見せ、授業後には関連する本を読んでいることを自ら話し、興味を持っていることを伝えてきた。また、街中で見かけた宣伝ポスターの内容について、自分たちが感じたことを真剣に話しかけてくる子どもたちもいた。

前述のように、筆者はSDGsを授業の題材として真っ向から取り上げることに對して、躊躇があった。しかし、そうした懸念は子どもたちの姿を見るにつけ、払拭されるどころか、子どもたちの姿に刺激されて教師自身の関心が高まる実感があつた。SDGsの内容は、従来の教育のように、教師が子どもに対して「教える」ものではなく、教師が子どもと「共に学べる題材」であるといえる。B児の振り返りを示す。

私は本当にいい経験をしたと思いました。SDGsの授業を最初の階段として、未来を支える私たちも対策をおこない、社会について考え始め、様々な方法を模索し、SDGsをGOALしたいです。(B児)

また、小学校6年生という年齢が、本題材を扱うのに相応しいと感じた。前述のように筆者は、チョコレート背景にある児童労働の実践を積み重ねてきた経験があるが、5年生で種を蒔き、6年生で本格的に取り組んだことで、子どもたちの中にすんなりと受け入れられたように思う。C児は授業を終えての振り返りに次のように書いている。

私は初めてSDGsと聞いたとき、とても難しく、大人の考えるものだと思っていました。しかし、調べていくうちに、どの人にも関わり、考えられることだと思いました。まだ、子どもだけではできないことはありますが、私が今回やったように子どもでもできることもあると思うので、そのことをこれからも続けていきたいです。(C児)

2 目標同士のつながりに気づく

広石(2020)が述べているように、SDGsが目指している持続可能という視点で地球の現状を見ると、「深刻化する環境問題の一つである気候変動によって、世界各地で大干ばつや大雨が頻繁に起こるようになり、海面上昇や農作物への影響なども拡大し」「それは、各国の農業や経済に大きなダメージを与え、食料不足や難民を生み出し、各地での社会不安を引き起こしている」。(21-22)

このように、問題は単一で起こっているのではなく、互いに絡み合い、影響しあっている。D児、E児、F児の振り返りにあるように、友達の発表から自然とSDGsの目標同士のつながりに気づいていったことは、子どもたちによる学び合いの成果と言える。

今回私が様々な実践をしてきた中で感じたのが「つながり」だ。例えば、(中略)飢餓は貧困につながる。また、質の高い教育にもつながる。また、家庭ゴミの話では、(13)(14)(15)の陸、海を守り、環境問題について考えるにもつながる他、安全な水とトイレ(6)にもつながる。衛生環境がいい街(11)にもつながり(12)のつくる責任、つかう責任にもつながる。このように一つの目標から派生して他の問題にたどりつく、つまり「全てつながっている」と私は思った。(D児)

*筆者注 ()内の数字は目標の番号

目標同士のつながりがとても感じられました。それは一つ一つの目標、解決を目指せば他の目標の改善や防止にもなると思ったからです。今回の場合だと目標13から地球温暖化を防ぐことによって絶滅してしまう生物を少しでも減らすことができ、それは目標15の対策にもつながっています。また、温暖化で海面が上がり、陸地が減ってしまっていることにも影響し、2つの目標を改善できると思ひ

ました。なので、一番の問題はやはり温暖化だと思います。(E児)

17パートナーシップで目標を達成しようは、他16の目標のまとめのようなものです。しかし、私はなぜ17があるのかよくわからなかったの、調べてみました。理由は、SDGsの目標1～16を達成するには、世界中の国の政府・国民・技術者・地域・企業といったありとあらゆる人たちが全員が結束してSDGsのに取り組むことが必要だからです。

そもそもパートナーシップとは、2名以上の者(パートナー)が金銭、役務などを出費して共同で事業を営む関係を言います。全ての発表を聞き、2030年、あと10年で全ての目標を達成するのは難しいと思います。

しかし、SDGs同士はとても繋がりが多かったです。なので、一つずつ解決していけば、芋蔓式に解決していくのではないかと思います。(F児)

また、授業中、質疑応答の時間に「その目標は、他の目標とつながるところがあるか」と友だちから問われた発表者が、改めて目標同士のつながりについて考える場面もあった。

G児：つくる責任使う責任(目標番号12番の発表)だと思うんですけど、今、レジ袋有料化じゃないですか。で、マイバッグ持って行っていると思うんですね。マイバッグを持って行くことにより、いろんなSDGsの目標が達成できると思うんですけど、15番(陸の豊かさを守ろう)と関連してるって言うていたんですけど、15番以外にどういう関係があると思いますか。

H児：エコバッグを持っていくことによって(中略)14番の海の豊かさを守るっていう面では、レジ袋が落ちていることで、海の生き物がいろんな被害にあっている事例を前、みんなの発表で聞いたので、14番ともつながると思うし、13番の気候変動っていうのは、プラスチックを使うっていうのは環境的にあまりよろしくないと思うので、マイバッグは関係していると思います。

* () 内筆者注

授業の中で、以上のようなやりとりがなされていたことから、筆者は、家庭実践を報告するレポートの形式を、最初の想定からすこし変更した。図2の右上、目標番号を書く部分をすこしひろくして、自分の実践がどの目標にかかわっているか、目標を複数書くことができるようにし、目標同士がつながっていることを意識できるようにした。

すると、家庭での実践の中で、自分の実践は複数の目標にかかわっているということを実感できる子どもが多くいたことが明らかになった。図2のレポート例では、「SDGsを意識した買い物」というテーマで、ふだんのスーパーマーケットでの買い物の際に、必要な食材を紙に書き出しきちんと使い切る、エコバッグを持参する、フェアトレードマークを意識したり、賞味期限の近い食品を選んだりする、などの実践をした。これらは、目標の2(飢餓をゼロに)、12(つくる責任つかう責任)、14(海の豊かさを守ろう)、17(パートナーシップで目標を達成しよう)など、複数の目標にかかわる実践であると書かれている。

6年 家庭科「SDGsを身近に感じ、今とこれからの生活をかえよう」 19.

実践レポート 3組 32番 氏名

題名	SDGsを意識した買い物	目標No.	2,12,14,17.
----	--------------	-------	-------------

なぜ、その目標に着目したのか

私は前目標12を知り、みんなの前で発表したのがきっかけで、これを実際に自分で実践したからです。そして12番を実践することによって目標2,14,17もできると思えたからです。

実践レポート 実践した日 12月 10日

今日はスーパーマーケットに行きました。その時、みんなが喜んでくれたことを実践してみました。まず、行く前に必要な食品を紙に書き出しました。この時、エコバッグを持参し、スーパーマーケットに行きました。スーパーマーケットに行き、食品リストに書いた食品を買いました。この時、フェアトレードマークの商品を買うことと賞味期限が近い食品を買うように意識しました。最後に、食品をビニール袋ではなく家から持ってきたエコバッグを使って持ち帰りました。

振り返り

今日はSDGsのことを意識しながらスーパーマーケットに行きました。今日、実際に実践してみた、あつめて一人一人の意識や行動が大層だと感じます。毎回、スーパーマーケットに行く時、目標意識したことに大層にしたいと思えます。

図2 家庭実践のレポート例

3 問いの種を孕むSDGs

新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、対話の時間を限定していたという理由もあるが、本実践では、子どもたち同士の意見交流の場は、一人ひとりの発表後に4分間の質疑応答の時間に限られた。しかし、授業が進むにつれて、自然に対話が生まれそうな場面がいくつか見られた。

例えば、目標5のジェンダー平等についての発表をした後で、次に挙げるような問いがあった。

I児 ジェンダー平等が実現することで新たな問題が出ると思うんですね。最近女性が仕事もしてき

- て子どもを産まないから、少子高齢化って言う問題があるんですね。そのへんはどうなのか。
- J児 ジェンダー平等っていうのは、文化をかえていくっていうことだと思うんですけど。昔から女性には、なにをなにするっていう国ごとの文化がある、例えば男子は狩猟に行くとか、それをかえない方が文化は失われなと思うので、文化は失われたらだめだと私は思うので文化を壊さないでジェンダー平等を実現するっていうのはどういうふうにすればいいのか。
- K児 もともと社会で強い立場を持っていたのが男性だから、男女の役割分担っていうのが野生に住んでいる生物においてもあるものだから、ある意味しょうがないと思う。だからそのあたりどの程度解決する必要があるのか。
- L児 ぼくはジェンダー平等に賛成じゃないんですけど、男性は仕事、女性は家事みたいな役割分担に今の世の中はなってしまうと思うんですけど、それなら逆に逆転しちゃうことで社会の変化、みたいなことはどのように考えていますか。

広石・佐藤（2020）は、SDGsのような複雑で正解が一つではない問題を考えるときには、「多様な価値観を持つ人がお互いの価値観を尊重しながら、コミュニケーションを深めることが必要になる」[122]と指摘し、「哲学対話などを通して多様な価値観にふれ、自分の規範を更新し続けること」[125]が、ユネスコの提示する「規範コンピテンシー」⁽⁶⁾を特徴づけるものだとしている。

SDGsは、子どもたちが対話をするための、問いの種を多く孕んでいる。子どもたちの中には、友だちとの対話を試みたいとする要望もあった。

一方、下手をすると二項対立の議論に陥り、内容が深まらない可能性もある。上記の質問内容を見ても、現在の自分の状況という限定された環境で語られている内容がほとんどで、なぜこの課題が世界的に解決すべき問題としてSDGsの目標になっているのかを理解する提供資料としては、子ども一人が3分間で行う発表のみではいかにも不十分である。客観的な事実を捉えさせておかないと、対話をきっかけに、かえって「自分の」正しさに正常性バイアスがかかってしまい、考えを固定化させる結果に終わりがねない。

筆者が一昨年度までの開発研究でてつがく対話に取り組んできた経験から言えば、対話が成立するためには、他者の考えを受けとめて考える経験を積み重ね、集団として対話ができる姿勢が身につけていることが必要である。

本授業においてSDGsから対話が自然に生まれてくるよさや、考え続けるためのきっかけとして、子ども同士の対話の有効性を強く感じた。しかし、どのような問いで話し合うか、対話を深めていくためにどのような資料を子どもたちに与えるかについて教師の吟味は欠かせない。

V アンケート結果の考察

授業後に子どもたちにアンケートを実施した。アンケートの主目的は、SDGsを題材とした次なる実践を行う上での参考にすることである。子どもたちは、本実践をどのように捉えたか、アンケートの結果と考察について述べる。

1 学びが大きかったのは友だちの発表を聞くこと

Ⅲ授業実践の流れで示したように、本実践では、新聞を書く、発表をする、友だちの発表を聞く、絵だよりに振り返りを書く、セブン&アイホールディングス本部へ訪問授業をするという学習活動を行ってきた。このいずれの活動から学ぶことが大きかったと感じたかを4件法（学ぶことが多かった、やや学ぶことが多かった、あまり学びはなかった、まったく学びがなかった）で聞き、その理由を自由記述で求めた。表3はアンケートの回答結果である。

表3 どの学習から多くのことを学んだか (26名回答)

	学ぶことが多かった	やや学ぶことが多かった	あまり学びはなかった	まったく学びがなかった	計
家庭学習でSDGs新聞を作った	14	12	0	0	26
新聞をもとに発表をした	14	11	1	0	26
友だちの発表を聞いた	21	5	0	0	26
授業後に絵だよりを書くこと	12	12	2	0	26
セブン&アイホールディングスで訪問授業を行った	14	7	5	0	26

このうち、もっとも学ぶことが多かったとの回答を得たのは、友だちの発表を聞いたことであり、26名のうち21名が、学ぶことが多かった、残りの5名もやや学ぶことが多かったと回答している。その理由について挙げている内容として大きく三点ある。

一点目は、非常に多岐にわたる内容を持つSDGsの全体像を知ることができたという実感を子どもたちが持った、ということである。理由の記述を原文のまま示す。「ぼくは、目標7だけ調べたのでほかのテーマのことはまったく知らないの学ぶことは多かった。」「自分が調べたこと以外、すべて、発表を聞くことによって『SDGsの全体像』が、保全への取り組み、支援などの事例によって分かりました。」「一つの項目だけしかとりあげなかったため、他の項目は知りませんでした。みんなの発表を聞くことにより、世界には、私たちが見えないところでどんなことに苦しんでいるのかについて知ることができ、身の回りにある出来事（例えばジェンダー差別についてなど）として自分にできることとして知ることができました。」

聞くという行為は一見受動的な行動のようであるが、子ども達の回答結果からはその限りではなかった。友達の発表でSDGsの目標について知るということは、〇〇さんが発表した目標、という意識で内容を捉えるため、より身近に、当事者意識を持つことができたという側面もあると考える。

一方、授業後に絵だよりを書くことについてあまり学びはなかったと回答している子どもが2名、訪問授業については5名であった。絵だよりを書くことにあまり学びはなかったと回答した子どもは、その理由として「僕は絵だよりに自分の持論を書いたため学びという面では比較的乏しかった」と書いている。訪問授業については「学んだことはこの前の授業と同じようなことだったから」としている。子どもたちにとっての学びは、自分以外の人の考えを知ることによって深まり、新たなことを知ることによって実感するものであることが示された。

二点目は友達の発表を聞くことで、自分にもできる取り組みが増えるという回答が見られた。学びがあったと感じた理由として「みんなが、実行しやすいようにそれぞれが考えていました。なので実行しやすかったんじゃないかなと思いました。」という記述にあるように、一人ひとりが家庭で実践するとき、何をしたらよいのか分からない、という声は出なかった。子ども達から実践のアイデアは多様に出ていたため、その中から自分ができることを選べばよかったわけである。このことは、毎授業後に短時間でも自分たちのできることは何か、という視点で、振り返りに付箋を書く活動を継続したことも、影響したかもしれないと考える。

三点目は、「内容だけではなく、プレゼンの上手いやり方も学べた。」「おもしろい発表のしかたを学んだ」という声があったように、発表の仕方を友だちから学んだと言う点である。実際に子どもたちの発表は、回を重ねるごとに上達していった。ふだんあまり声をあげない子どもがはっきりと自分の意見を述べている姿があったり、友だちの発表に刺激を受けて、自分の発表に生かそうとする姿が見られたりした。一人ひとりの発表の仕方に違いがあることで、自分のプレゼンテーションを工夫しようと感じていたことが明らかになった。

この点に関連して、本実践を通して、「発表の担当日になるとときどきする」、といった声が多く聞かれた。それはどうしてか尋ねると、「だって、みんなの発表がすごいから自分も頑張らなくちゃと思って」

と言う。子どもをどきどきさせる、これは授業者にとって、授業の醍醐味のひとつであると思う。

2 授業後の行動や意識の変容

本授業では、SDGsと自分の生活とのつながりに気づき、自分のできることを考えて実践することをめあてのひとつとした。子どもたちに授業後の行動や意識に変化があったかを尋ねたところ、表4のような結果になった。

表4 この学習を通して行動や意識に変化がありましたか（26名複数回答）

①SDGsに関する新聞記事や街の広告などに目が行くようになった	②ふだん自分が行っていることが、SDGsにつながっていたのだということ意識するようになった	③家族や友だちなどとSDGsについて話をするようになった	④買い物の時にSDGsを意識して商品を選ぶようになった	⑤その他	⑥行動や意識にまったく変化はなかった
24	17	16	8	6	0

表4中①～④の項目は、選択肢を示して複数回答可とした。行動や意識の変化のうち、最も多かった項目は、SDGsに関する新聞記事は街の広告などに目が行くようになった、ということで26名中24名が選択している。行動や意識にまったく変化がないと答えた子どもは一人もおらず、授業を通して生活上に何らかの行動や意識の変化があったことを示している。

ふだん家庭科の授業を通して、子どもたちの日常生活の行動や意識を変えるのは難しいと感じている。アンケートの結果に表れたように、本授業でこれだけ行動や意識の変化が起こったということは、子どもたちの発表が2週間に1時間ずつ、およそ2ヶ月間にわたって継続して行われたことで、SDGsに対する意識が醸成されたものと考えられる。先述のように友だちの発表から知識を得たことで、より自然な形で子どもたちの意識の中に自然に取りこまれていったことにも由来するであろう。

表4中の⑤その他を選択した子どもたちは、次のような変化があったと回答している。

- ・SDGsのワークショップに参加するようになった
- ・昔はビニール袋やペットボトルを良く使っていたけれど、SDGsを通してエコバッグや水筒を使うように意識している
- ・興味が沸き、どんどんインターネットなどで調べるなど
- ・物を使ったり買ったりする時に、本当にそれは必要なのか？それを必要としている人たちがいることなどを考えるようになった
- ・あらゆることをSDGsとつなげた

子どもたちの中には、M児のように、フリーザチルドレンのオンライン会議に出席したり、新聞社主催の沖縄のジュゴンを守る活動に参加したりと、意欲的な行動を見せる子どももいた。こういった子の経験が教室で語られることにより、他の子どもたちへの刺激になっている。M児の授業後の振り返りである。

約8ヶ月間、たくさんの催しに参加してきました。また、セブン&アイホールディングスさんの本社で発表させていただく機会もありましたが、やっぱり「協働」が大切だなと思います。もちろん調べることも大切ですが、それを共有するまでが重要でした。(M児)

3 授業のアイディア

アンケートの最後に、SDGsについてどのような学習ができるか、というアイディアを聞いた。

その中で、今回は、SDGsの全体を扱う実践としたが、目標の一つをみんなで決めて達成に向けてやってみるのはどうか、という提案があった。家庭科の学習内容には、SDGsの目標と直結する内容が多い。子どもたちが挙げた具体的な例として、SDGsを意識して調理実習をする、SDGsにかかわる商品を使っ

てごはんを作る，アップサイクル・3Rに注目して工作してみる，エコたわしをつくり，1個は家庭科室に，もう1個は家庭に置く，実際に買い物をするなど，実際に作ったり行動したりする学習が可能ではないか，というアイデアが出された。

また，街のSDGs探しをして，まちの未来をよりよくする方法を考える，という案を出した子どももいた。このように身近な環境をSDGsの視点で見直す，という学習も有効であるし，自分たちで提案する，という活動はぜひ実際に取り入れてみたい。

ボランティアに参加する，全校生に広めるようなポスターを貼るなどのように，教室を出て，社会活動に参加したり，自分たちが得た学びを周囲の人に伝えたりする活動を考えた子どももいた。本当にその目標を達成する必要があるかどうかを考えさせる学習も必要ではないか，という投げかけとともに，SDGsに追加すべきもの，今ある中で不要なものを考える学習もできるのではないか，という提案もあった。与えられたものをすべてよきもの，とするだけではなく，本当にそれは必要なのかと立ち止まって考える視点は，大切にしたい。これは，SDGsに限らず，である。

VI ま と め

1 本実践から明らかになったこと

本実践から明らかになったことは，まず，SDGsを題材とした学習は，子どもたちに意欲を喚起し，教師が子どもと「共に学べる題材」であるということである。SDGsを学んだことがよい経験だった，そして，この経験をきっかけにこれからの社会について考え始めた，という子どものふり返りからもそのことが読み取れる。

互いの発表から子どもたちは，SDGsの目標同士のつながりに気づき，対話の種となる問いが生まれた。友だち同士の考えの違いを聞き合うことは，子どもたちにとって学びが深まる実感があり，本実践では振り返りを個人で記すだけにとどまった絵だよりをクラスみんなで見せ合い，質問などをし合うとよいのではないか，という新たな授業のアイデアも示された。

授業後のアンケートから，子どもたちは，友達同士の発表を聞き合うことによる学びが大きかったという実感を持ったことが明らかになった。その理由としては，多岐にわたる内容を持つSDGsの全体像を知ることができた，家庭で実践するときのアイデアが多様に示され，自分にもできる取り組みが増えた，発表の仕方を友だちから学んだという回答があった。

また，本授業を通して子どもたちの生活上に行動や意識の変化があったことも明らかになった。本実践がおよそ2ヶ月間にわたって継続して行われたことや，友達の発表から知識を得たことで，自然な形でじわじわとSDGsに対する意識が醸成されたものと考えられる。これは，身近な生活の内容を扱う家庭科だからこそできることであり，生活の中の当たり前を問い直す学びは，人間形成にも大きく寄与する。一方，すべてをよきものとして伝えるのではなく，時に批判的に問いかける姿勢は，手放さずにいたい。

2 次の授業実践に向けて

これまで述べてきたことをふまえ，次の授業実践に向けての展望を示して本稿の結びとする。

授業を通して，地球の一員として，地球規模で起こっていることを知り，より広い視野で自分たちの生活の課題を捉え，よりよくしようとする姿勢を醸成したいと考える。

具体的には，友達同士の交流や対話を学習活動の中心に据え，SDGsの目標のうち焦点を絞ってその達成に向けた提案を考える題材を構成する。そして提案を実際の生活に生かし，行動を通して持続可能な社会へのまなごしを育むことをめざす。可能であれば，子どもたちの持つ社会への発信力を生かして専門家との交流をはかり，子ども達を本気にさせ，どきどきさせる授業へと発展させていきたい。そのためには，ある程度の長い期間をかけてじっくりと取り組むことが有効であり，時間数の確保，家庭科の学習計画の吟味も必要となる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導いただきました横浜国立大学松葉口玲子教授、お茶の水女子大学小玉亮子教授、授業実践にご協力いただきました、家庭科非常勤講師川上圭先生、梅本亜香里先生に深く感謝申し上げます。

【注】

- (1) お茶の水女子大学附属校園の連携研究の一つであるエシカル・ラーニング部会の活動概要は、ホームページで紹介している。エシカルラーニング・ラボホームページ (<https://www-p.fz/ocha/ac/jp/renkei/ethicallearning.html>) にあるように、エシカル消費とは、環境や人権などの社会に配慮した消費スタイルのことを指す。
- (2) 授業の詳細は、岡部雅子 (2019) 「独りで決める、みんなで決める 意思決定する力が求められる背景と食育・家庭科・社会科での学び」NPO法人お茶の水児童教育研究会, pp.72-79に記載。
- (3) WFPとはUnited Nations World Food Programmeのことで、飢餓と貧困をなくすことを使命とした国連の食料支援機関。2020年にノーベル平和賞を受賞した。ホームページは<https://ja.wfp.org>
- (4) 瀬戸内オリーブ基金。当時日本最大規模と言われた有害産業再起物不法投棄事件「豊島事件」をきっかけに設立されたNPO法人。次世代へ美しいふるさとを引き継ぐことを使命として瀬戸内エリアの環境保全と再生等に取り組んでいる。ホームページは<https://www.olive-foundation.org>
- (5) ユネスコは、持続可能な社会の担い手に求める「持続可能性キーコンピテンシー」を提示している。それらは、システム思考、予測、規範、戦略、協働、批判的思考、事項認識、統合的問題解決の8つである。(広石・佐藤 2020 p.113)

【引用・参考文献】

SDGsスタートブック (2020) 東京書籍

お茶の水女子大学附属小学校 (2021) 第83回教育実際指導研究会発表要項「学びをあむ」NPO法人お茶の水児童教育研究会

外務省 JAPAN SDGs Action Platform. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html>. (アクセス日2021年8月9日)

広石拓司 (2020) 「SDGsから始まる未来に求められる人材とは？」佐藤真久・広石拓司『SDGs人材からソーシャル・プロジェクトの担い手へ』みくに出版, pp.21-22 p.122 p.125

文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説家庭編 p.17

北村友人 (2019) 「SDGs時代の教育—すべての人に質の高い学びの機会を」北村友人, 佐藤真久, 佐藤学 学文社 p. i